

花火

——ディバンの夜会——

それは、サファイアの宝石箱をひっくり返したような華やいだ一夜だった。

夜会はチボリ公園の中のレストラン「ディバン」で行われた。チボリ公園はデンマークが世界に誇る遊園地である。コンサート、鼓笛隊のパレード、曲芸、パントマイム劇、射的など数多くの楽しみがある。

回転木馬、ジェットコースター、てんとう虫と呼ばれるローラーコースター、色とりどりの11万個の豆電球が美しい噴水や咲き乱れる花壇の花を鮮やかに照らし出す。レストランの窓からは大きな池が見え、海賊船らしいものが浮かんでいる。

大人（たいじん）の趣のある大柄なケーニッヒがおもむろに開会のスピーチを始める。

戦後50年の記念すべき時に I L N（インターナショナル・ローヤーズ・ネットワーク）の年次総会をここコペンハーゲンで開催できたことを非常に名誉に思う。

50か国から集まった60余名の同業者諸君、今夜は心ゆくまでチボリ公園の夜のひと時を楽しんでくれたまえ……。

80才近く、対独レジスタンスの英雄であったケーニッヒは、プラチナと見紛うばかりの見事な白髪でその悠揚とした挙措動作とあいまって衆望を集めていた。多少聞き取りにくい英語だが、彼の人柄は皆を魅了するに十分である。

ケーニッヒの簡単なスピーチが終わった後、代表理事のラリーが「今夜のディナーは全てケーニッヒのおごりである」と打ち明けて感謝の辞を述べ、ケーニッヒの健康と I L N の発展を祈って乾杯。2日に渡る総会の終わった気安さに会場は早くも熱気に包まれる。シャンペンが抜かれ、ビール、ワイン、ウィスキーがたちまち空になっていく。

わたしのテーブルには旧知のオンデル（フィンランド）、ロンバルディ（イタリア）の他、オランダやノルウェーからの代表が同席である。

今夜のメニューはグリルしたロブスターとスカラップ、それにデンマーク・ラムの鞍下肉で、バター炒めのほうれん草、ガーリックとハーブ風味のマッシュルームが添えられている。

——王様の代理人——

メインディッシュが終わると、皆立ち上がりあちこちのテーブルで話の輪が広がる。弁護士は自信家が多いから集まるとどうしても自慢話になる。国も習慣も違う様々な国から集まった仲間たちに自慢するには、自分が一流のクライアント（依頼者）を代理していることを話すのが効果的。この場合のクライアントは国際的に名の通っている多国籍企業に限る。ローカルなクライアントでは良いクライアントでも迫力がない。

フランス代表が「うちの事務所はIBMやJP MORGANの仕事をしている……。」というのと、「わたしの事務所もIBMの仕事をしている。じゃあIBMの某を知っているか？」イタリア代表が問返す。

自分はダイムラー・ベンツの仕事をしているとか、GMの代理をしているとか、トヨタのヨーロッパ進出を手伝ったとか、みんな結構かまびすしい。

「みんなちょっと待て……。」ミスター・モロッコが太い声で吠える。

ミスター・モロッコはスンニ派のイスラム教徒で頭の回転は抜群、ジョークのセンスがあり、押しの強さもなかなかながら妙に憎めないところがある。

おまえたちは多国籍企業のトップと親しいなどといっているが、俺の場合はそんなもんじゃない……。

俺のクライアントは王様だ！

そういい放ち彼は皆を睥睨（へいげい）する。

これで決まり。誰も王様の代理人にはかなわない。そういえば、モロッコは「西の王国」を意味し、王朝が連綿と続いている立憲王制国だったのだ。ミスター・モロッコの迫力には脱帽。

誰かが、「おまえは昔モロッコの王様だったんじゃないか？（「昔は王様だったのに追放されて今は弁護士業をやっているのではないか」の意）」とちやかすが、犬の遠吠えにも似て駄洒落にもならない。

——「芸人」たち——

宴もたけなわになると、新しくネットワークに加盟したスウェーデンの弁護士が突然立ち上がり、「静粛に、静粛に。」と叫ぶ。

背の高さ160センチ位の白人にしては小柄で童顔、背格好も日本人と変わらない。

ネットワークに入会した記念にスウェーデンの歌を今から歌う……。

スウェーデンの歌なら何となくのどかな歌かと思っていると、案に相違して彼は片手を交互に天に突き上げ突然蛮声を張り上げる。「△△△！×××！

——！」

スウェーデン語なのか何語か分からないがそれはもう歌というより叫び声に近い。

旧制高校の寮歌もどきの蛮声を張り上げ、床を踏みならして踊る様は、同業だとは思えない。一瞬皆も度肝を抜かれたものの、やんややんやの喝采。真面目な顔つきの男だけに、そのアンバランスがおかしい。昔、大学の寮祭で、豪傑の青山が相馬の踊りだとかいって奇声をあげ下手な踊りを踊ったが、あれを彷彿とさせる。

スウェーデンに触発されて、次にはアイスランドの弁護士が立って歌い始める。こちらは素晴らしい声で張りがあり、まるでクラシックでも聞いている様。拍手の終わった後の自己紹介によると彼の趣味は演劇で余暇には劇団に属している。素人劇団とはいえセミプロに近く、週3回は練習するとの事。

「本業は俳優で余暇に弁護士をやっているんじゃないか？」皆から賞賛のジョークが飛ぶ。

彼の歌が終わると、ポルトガルの若い女性弁護士が長い黒髪をなびかせ朗々と歌い始める。それを見てたまらずブラジルのカルロスも加わって2人で歌い始める（カルロスはもう60代初めのシニアの弁護士である）。同じ言語で同じ歌を年代も国も違う2人がデュエットで歌うさまはうらやましくもある。この夜はヨーロッパ勢が中心となり、今までの総会とは違った余興の場となった。今までのディナーパーティーは会話を楽しむのが主で、こんな騒ぎになったことはない。それもこれもチボリ公園という舞台とホストのケーニッヒの演出の賜物である。残念ながらわたしの様な無芸大食漢には活躍の場は全くない。

2時間ほどでパーティーも終わり、後は三々五々公園の散策に出かける。9時過ぎというのに北欧の空はまだ薄明るく、夜の帳も降りていない。わずかに冷たい夜気が軽く酔いのまわった身体に心地良い。北欧の春の夜のそぞろ歩きは値千金である。

——そして花火——

インド系のマレーシア人アナドとぶらぶら歩いていると、「空飛ぶ絨毯」に乗って子供たちが歓声を上げている。彼が「一緒に空飛ぶ絨毯に乗ろう」とわたしを何度も誘う。

「オレも50代になったし、今更空飛ぶ絨毯でもないさ」といっても、「年は関係ないさ」と誘う。面倒なので軽くいなす。

母親の遺言で空飛ぶ絨毯だけには乗るなといわれているからダメ。

真っ赤な大きな口のピエロのパントマイム劇を見たり、射的に興じたり、楽団の演奏を聞いているうちに、時はたちまちに過ぎ去る。

やがて零時近くなると、突然公園の中央からボーンという爆発音がして、花火が春の夜の空一杯に広がる。花火の赤、黄、青、緑の火の粉が漆黒の暗闇を貫き、光のページェントが展開される。

打ち上げ花火に続き仕掛花火がうなり音を発しながらうずまき状に弾ける。巨大なねずみ花火の様にうずまきは回りながら黄粉をまき散らす。「シュルシュル、シュルシュル」うなり音が耳を打つ。黄粉は地面に落ちる途中で次第に白色に変わる。人々はその見事さに歓声をあげその華麗さに心まで魅せられてしまう。

空には再び大輪のユリの花のような打ち上げ花火が弾ける。大輪の白ユリがいくつも暗い夜空に花開く。

それに続いて深紅と紫の花火が全空を覆い、まるでバラ星雲を見るような美しさ。光が夜空を貫き、うなり音が轟き、火の粉が舞い、硝煙が漂う一大ページェントとなった。

深夜1時。花火も終わり突然静寂が訪れる。灯も消え人も疎らになり、チボリ公園はひっそりと闇の中に沈む。

楽しき夢幻の様な一日が終わった。そしてわたしは自分に問いかけた。

花火が人を惹きつけるはなぜだろう？人は花火の一瞬の美しさにみずからのはかない人生を重ね合わせるのであろうか。

面白くやがて淋しき花火かなー。

注目！注目！

宴の闌、ケーニッヒが大きなジョッキをスプーンで叩きながら立ち上がる。

I L Nの結成以来6年間、わたしはヨーロッパ地区の代表理事をしてきたが、わたしも老い、もう若い世代にバトンタッチをする時期がきた。体力的にももう実務に携わるのも困難だし……。

ケーニッヒの言葉が終わらないうちに、即座にヨーロッパのメンバーが立ちあがり数名「辞任反対、辞任反対」と叫ぶ。

ミスター・ケーニッヒ。あなたはわれわれの敬愛の的であり、的確な判断と公正な人柄はわれわれの……。

さすがに弁護士とわたしが思ったくらい即座に見事なスピーチをしたのは訴訟弁護士であろうか。「辞任反対」の拍手が鳴り響き、ケーニッヒは再び立ち上がり、深く感謝の意を表し、とりあえず1年間はヨーロッパ地区理事を続けることになった（翌年の年次総会を前にケーニッヒは辞任した。代表理事になりたい者が多い中で見事な引き際であった）。